

リテラシー教育は必須

健康、衣食、学び…生活のさまざまな分野に人工知能（ＡＩ）が深く浸透しつつある現状を連載で紹介してきた。ただ、ＡＩは日々の暮らしを手助けしてくれる半面、プライバシーの問題や偽情報など悪用される危険性もはらむ。私たちはＡＩとどのように付き合い、何に注意すればいいのか。京都の研究者に聞いた。

京都橋大学部

松原仁教授

2010年代にＡＩのディープラーニングが登場した時は、画像や音声などの認識が主流だった。2年前に米企業オープンＡＩが開発した対話ＡＩサービス「チャットＧPT」は流暢な文章の生成まででき、研究者から驚かれた。ネット上の膨大な情報を読み込ませ、量が質に転化した。現在のＡＩは、膨大な情報から、ある手法に基づいて答えを探し出す。それが合っているかどうかは意識せず、「こういう似ているものがありますよ」と答えを提示する。大体的場合は正解だが、情報が少ないと不正解になることもある。得意な分野は、定型の文章の生成や翻訳、要約など。創造、創作的な分野にも入ってくるだろう。ただ、

4 今後の付き合い方

京都大学研究科

高橋由光特定教授

ＡＩのプロセスには「開発・学習」と「生成・利用」の二つの段階があり、それぞれに注意点がある。「開発・学習」段階では、事業者が個人情報を含むビッグデータを活用する際、個人を特定できないよう匿名化することが求められる。今後、ＡＩの発展で、多くの事業者が市民に健康記録や学校の成績などセンシティブな個人情報の二次利用を求めていることが予想される。情報の流出や悪用を防ぐため、信用できる事業者かどうか見極める必要が出てくるだろう。ＡＩのサービスを「生成・利用」する段階では、生

正・誤・偽情報 あるものと捉える

生成ＡＩは、基本的には過去に人間が作ったものから学び、芸術の評価もできないので、ぶつ飛んだ作品を生むことはあまりない。当面は作品のヒントを得るために使われるのだと思う。結果的に、人間だけではできなかった小説や音楽などが生まれれば、その現実を楽しみたい。将来はロボット自身が自分の目や耳で世界を耳聞きし、その実体験に基づいた芸術を生み出すかもしれない。これはジョークだが、ロボット芸術家は、ロボットを感動させる作品を作る

ののではない。そうすると感動とは何かという問題になる。教育分野でも、ＡＩは個別に最適な問題を出したり、自分の考えを整理したりするのは向いている。ただ、人間の対面教育は絶対に必要だ。仲間と協調したり、人を説得したりすることを学べるからだ。今後、学校の学びと、自宅でのＡＩによる学習で役割分担していく可能性はある。一方、子どもたちにはＡＩリテラシー（知識や判断力を教えないといけない。「ＡＩを使っているだけ」

ネット上にあふれ、多くの人が真偽の見極めに苦労した。最近の選挙でも類似の現象が起きている。ＡＩの普及で、誰もが複雑な情報を取得力のある形で簡単に発信できることが可能になると、同様のことが日常的に起きかねない。情報の真偽を見極めるためには▽書いたのは誰か▽元ネタは何か▽違う情報と比べてか▽いつのものか▽などいくつかのポイントがある。幼い頃からリテラシーを身に付ける教育が欠かせないだろう。ネットの百科事典「ウィキペディア」が登場した時、本の事典と比べて正確でないという議論が出た。しかし、今となつては誤りもあるという前提で参考程度に利用している人が大半だ。



まつばら・ひとし 東京大学大学院情報工学専攻修士。東大教授などを経て、2024年4月から現職。専門は人工知能。人工知能学会元会費。ＡＩと共同で手塚治虫の新作漫画を制作したこともある。

たかはし・よしみつ 京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻修士。同科健康情報学准教授などを経て、同科ハブリックヘルス実証学講座特定教授。専門は健康情報学・予防医療学・公衆衛生学。

判断力や個性、より重要に 薬にも毒にもなる、自覚を



ない時には使わない」「使った時には使った」と言つた。文章の作成や計算などは自分でも間違いに気が付くようにしておくべきだ。将来、ＡＩなしの生活は考えられないので、付き合い方のマナーを身に付けておく必要がある。今後はＡＩが調理的な仕事をしたり、知識を集めた

仕事は、いろんな人をまとめたり、データの中から判断したり、責任を取ったりすることになる。例えば、我慢強さが求められる仕事などをＡＩがしていくと、より面白いことを考える人間が尊重されるようになる。人間は個性を出すことがより求められる。また難しくなるだろう。（聞き手・三村智哉）